

イレッサ・・・病巣“狙い撃つ”新薬

大阪府の男性Cさん（69）は、早期の肺がんが見つかり、1998年10月、府内の病院で、右肺の上部3分の2を切除する手術を受けた。

しかし、半年後、残っていた右肺下部に再発。抗がん剤治療を始め、がんが縮小する効果はあったが、白血球減少などの副作用も強かった。「それ以上の薬の使用は危険」として、打ち切られた。

治療は行き詰まった。

【少ない副作用】

「別の（既存の）抗がん剤に切り替えましょうか。それとも、臨床試験中の新薬を使ってみますか」



経口薬ZD1839(イレッサ)の服用により、患者の肺がん(点線部分)は数か月後に縮小した(下)

主治医の言葉にCさんは戸惑った。新たな肺がんは、気管支の末端にできる「腺(せん)がん」と呼ばれる種類で、抗がん剤が効きにくいとされる。

かつて製薬会社に勤め、そうした知識のあったCさん。「既存の抗がん剤では、吐き気など副作用が強く、効果もそれほど期待できない。新しい薬にかけよう」と決心した。

この薬は、抗がん剤「チロシンキナーゼ阻害剤」の1つで、経口薬のZD1839。がん細胞の増殖を分子レベルで妨げる。がん細胞だけを狙い撃つ「分子標的薬」だ。

従来の抗がん剤が、がん細胞だけでなく正常細胞も攻撃し、免疫機能の低下、吐き気、脱毛などを引き起こすのに比べ、副作用が少ないとされる。

Cさんは昨年3月から、この薬の服用を始めた。数か月後には、がんはほとんど消失した。副作用は、軽い発しんが右ひじ周辺に一時出ただけだった。

【自宅治療も可能】

「今までの抗がん剤は病院で何時間も点滴しなくてはならなかった。この薬なら自宅で治療でき、普段通りの生活を送れます」

先月末、孫を連れて念願の北海道旅行をした。

抗がん剤治療に詳しい近畿大第4内科教授の福岡正博さん（60）によると、98年8月から、この薬を服用した肺がん患者23人のうち、5人にがんが半分以下に縮小する効果があった。そのうち3人は、がんの縮小や消失が1年以上続いている。

「従来の抗がん剤が効かなかった人たちが対象なので、この薬の有効性は高い」と福岡さん。製薬会社は今年中に国に承認申請する予定だ。

肺がんに対する抗がん剤治療は、この20年間、「カタツムリの歩み」と言われるほど、なかなか進まなかった。それが、分子標的薬の登場で、一步踏み出そうとしている。



〔分子標的薬〕 がん細胞の増殖、転移などに関係する分子レベルの要因を制御する。今春、乳がん治療薬として承認されたハーセプチンも同じ仲間だ。がん細胞に栄養を送る血管の新生を防ぐ薬などもあるが、延命効果について不明なものも多い。

（2001年8月9日）